

最終講義『物語要素事典』の誕生と成長

神山重彦

定年まであと1年を余して、退職することとなりました。大きな理由は、私の病気です。「小脳皮質萎縮症」という難病で、私は2013年の10月に、この病気だと診断されました。

これは、脳の指令を神経が適切に身体に伝達せず、いろいろな不都合がおこってくる病気です。目だった症状としては、歩行困難と構音障害です。構音障害というのは、うまくしゃべれない、呂律がまわらない、ということです。これは教師としては、ほとんど致命的です。

加えて、コロナウィルスの蔓延ということもあります。うかつに外出しますと、私のような高齢で、しかも病体の者は、感染しやすく重症化しやすいそうです。これはもう退職して家にこもるのが、私はもちろん、家族（家内1人と猫1匹）にとっても良いのではなにか、と思いました。

退職にあたり、最終講義をいたします。大勢が教室に集まるのは避けるべきだし、自由にしゃべれなくなって退職するのですから、こうやって文書を作ってお送りします。

『物語要素事典』の誕生と成長、というタイトルです。私の一生にとりまして、「物語」というものが、非常に大きな意味を持っているのです。

子供の頃

幼い頃を振り返ってみますと、私は絵本が大好きでした。絵本は10ページほどですから、家で買ってもらったものは、すぐに見終わってしまいます。それで、親戚の家や友達の家へ行くと、必ず絵本を見せてもらいました。

いろいろな絵本を見て行くうちに、絵本には2種類あることに気づきました。面白くて

夢中になって見る絵本と、それほどでない絵本がありました。面白いのは、『桃太郎』とか『かぐや姫』などの、ストーリーのある絵本。それほどでもないのは、植物図鑑とか昆虫図鑑とか、ストーリーのないものでした。それで「自分はお話が好きなんだなあ」という自覚が芽生えました。

もちろん、お話以外にも好きなものもありました。夜空の星を眺めるのが大好きでしたので、名古屋市科学館のプラネタリウムに通いました。特に小学6年生から中学1年生にかけては、天文学の本に熱中し、毎月1度、時には2度、科学館へ行きました。

そうしているうちに、絵本を見ていた時と同様のことが起こりました。プラネタリウムで星を見ながら解説を聞きます。その解説に2種類あることに、気づいたのです。地球や太陽や月などの地学的な話と、星座の話・ギリシア神話の話です。どちらも好きでしたが、より好きなのはどちらかと考えてみると、私はギリシア神話の方が、より好きなのでした。

そして小学校6年生の10月（1963年）。私にとってはきわめて重要な、一生忘れられない経験をしました。秋の星座、ペガサス座・アンドロメダ座・ペルセウス座などの解説がありました。アンドロメダ姫が、海の怪物（星座だと、くじら座に相当）への生贄として捧げられます。アンドロメダ姫が海辺の岩に鎖で縛りつけられています。姫を食おうと、海の怪物がやって来ます。その時、天馬ペガサスにまたがって上空を通りかかるのが、英雄ペルセウスです。ペルセウスは海の怪物を退治してアンドロメダ姫を救い、彼女と結婚します。

これをプラネタリウムの解説で聞いているうちに、私は4年前、小学校2年生の秋に見た映画『日本誕生』（東宝映画 1959年）を思い出しました。『日本誕生』は、『古事記』のヤマトタケルの一生涯の物語を軸に、アマテラスの岩戸隠れの神話と、スサノヲのヤマタノヲロチ退治の神話をその中にはめ込んだ、上映時間3時間余りの、総天然色（カラーの古称）の大作映画です。

映画では、クシナダヒメが大蛇ヤマタノヲロチへの生贄に定められます。そこへ高天原を追われたスサノヲ（演ずるのは三船敏郎）が訪れ、ヤマタノヲロチを退治して、クシナダヒメと結婚します。

私はギリシア神話の話を聞きつつ、ヤマタノヲロチ退治の話を思い浮かべ、日本神話と、遠く離れた国のギリシア神話とが、どうしてこんなに似ているのか、たいへん不思議に思いました。この時の驚きの体験が、その後の物語研究の原点になったと思います。

物語の創作から研究へ

それと並ぶ重要な経験が、もう一つあります。プラネタリウムの経験から2年後、中学2年生の夏休み（1965年8月）に、星新一のショートショートに出会ったことです。短いページの間で次々に展開する意外な物語の連続に、「こんな面白いものが、この世にあったのか！」と私は驚喜しました。それからはもう夢中です。星新一のショートショートを追いかけて100編、200編と読んで行くうちに、やがて「自分でも書いてみたい」と思うようになりました。中学時代の後半～高校時代は、私は授業中にもショートショート アイデアを考える、というふうになってしまいました。

ところで、「こんな素晴らしいものが、この世にあったのか！」と驚く経験は、この時がはじめてではありません。7年前の小学校1年生の時にも、同様の思いをしました。

小学校1年生の3学期が始まる直前の日曜日、母親と一緒に親戚の家へお年始に行き、そこで生まれて初めて、カレーライスというものを食べました。こんなおいしい食べ物がこの世にあったのか、と私はびっくりしまして、それからは「家でもカレーライスを作ってほしい」と、私は母親に要求し続けました。

それほど好きなカレーライスだったのですが（今現在でも大好きです）、将来私自身がシェフになって、おいしいカレーライスを作り、皆に食べてもらい喜んでもらおう、という方向には考えが向きませんでした。エスビー食品とかハウス食品に入社して、新しいカレーの研究開発をしよう、というふうにも考えませんでした。カレーについては、消費者として、ひたすら食べるだけで満足していたのです。

それがショートショートの場合は異なりました。読者（消費者）であるだけでは、満足できなかったのです。自分でも面白いショートショートを作り、多くの人を喜ばせたいと思いました。私が星新一のショートショートを読んで味わったのと同じ喜びを、多くの人にも味わってもらいたい、と考えたのです。

しかしいろいろ作ってはみるものの、星新一を超えることは困難、いや不可能であります。はじめは「プロの小説家になりたい」と思っていたのですが、明らかに力不足です。そもそも、新しい物語のアイデアを一生考え続けて行けるだけの、気力（意欲・熱意）も覚悟もないことが分かって来ました。それでも文学作品を読むことは好きでしたから、やがて「創作ではなく研究という面から、文学に取り組もう」と考えるようになりました。

そこで大学の文学部へ入学して国文学（日本文学）を専攻し、大学院へも進学したのですが、それは私の期待するような世界ではありませんでした。一人の文学者・あるいは一つの作品を深く掘り下げるのが、一般的な研究様態です。授業も、一人の文学者・一つの作品を詳しく解説するというものでした。

私としては、「人類が作って来た物語の総体を把握したい」という思いがありながら、20代の頃は、自分でその思いを意識化することができませんでした。ですから、大学や大学院の授業でやっていることや、先生方が研究しているテーマについて、「これは私が求めているものとは違う」とは感じながら、では私は何をしたいのか、つかめなかったのです。

自分で自分のやるべきことがわからず、人から「お前の研究分野は何か？」と聞かれても、答えられませんでした。時により「説話です」と答えたり「和歌です」と答えたり、まるで支離滅裂でした。

そういう状態で年月は過ぎ、大学院の5年の修業年限が終わりました。1980年になって、運よく山形大学の教養部に就職できましたので、私は生まれてはじめて名古屋の地を離れ、以後40年を越える教師生活が始まりました。

『物語要素事典』の構想

私は、肩書だけは大学の専任講師となったのですが、実力が伴っていないことは、充分にわかっておりました。そこで「何とか一人前の研究者として認めてもらいたい」と思い、最初の年度が終わる頃、『伊勢物語』に関する論文を書きあげて、ある雑誌に投稿しました（1981年）。その雑誌に論文が載れば一人前の研究者と見なされる、という権威ある雑誌です。

私としては、かなりの自信を持って投稿したのです。ところが間髪を入れず、断りのハガキが帰って来ました。活字印刷の「御投稿いただき、ありがとうございました。せっかくながら、御論文は当雑誌の編集方針とは合いませんので、掲載は見送らせていただきます」というような文でした。途中で空欄があって、そこに手書きで、私が投稿した論文のタイトルが書いてありました。

私は、論文が不採用になったことに、本当にびっくりしました。さあ、私はこれからどうすべきでしょうか？ 一度の不採用にめげず、何度も何度も投稿すべきでしょうか？ 一時はそういうことも考えました。原稿が採用されるまで、しつこく何度も投稿する。そ

うすると雑誌の編集者も、私の名前を覚えてくれて、「お前の論文はここがいけない」とアドバイスをくれるかもしれません。そこまでいけば、論文掲載の可能性も高くなるでしょう。

私の『伊勢物語』の論文というのは、通説に異を唱えるものでありました。その当時の『伊勢物語』研究の権威、第一人者に論争を挑むような内容でした。ですから、これが学会誌に掲載されたら、学界の大物と論争せねばならない。それはしんどいことではあるけれども、一つやってみるか。一人前の研究者になるには、それくらいしなきゃだめだ、という心構えだったのです。

しかし、私はそういうことのできる性格か、と自己を反省してみると、そうではありません。私は何ごとも、一度うまく行かないと、わりあい簡単にあきらめる性格のようです。

大学院へ進学してすぐの頃、恩師・後藤重郎先生（1921～2006）から、「神山君。あなたは、多くの研究者からたくさんの刺激を受けて、研究をするタイプですか？ それとも、一人で静かに研究を続けて行くタイプですか？ どちらですか？」と聞かれたことがありました。

その時（23歳）は、自分がどちらのタイプかわからなかったもので、何ともお答えのしようがありませんでした。しかし20代も末になって、戦闘的論文の投稿・不採用、という経験をしてみると、「私は、議論・論争などはあまりせず、一人で自分の世界を作って行く方が合っているなあ」と、気づきました。

「本当は自分は何がしたいのか？」と、私は考え始めました。2ヵ月くらい考え、ちょうど30歳の誕生日（1981年6月19日）を迎える前後によく、「自分は、日本のみならず外国の文学も対象にして、人類が生み出してきた物語世界全体を概観したいのだ」と自覚することができました。

研究の目標は自覚できましたので、それをどのように実現するかを、次には検討しました。当初の計画としては、論文20～30編を積み重ねて、50代になったら著書にまとめようと思いました。主要な物語要素、「のぞき見」とか、「継子いじめ」とか、「異郷訪問」とか、「貴種流離」などをテーマとする論文を20～30編書いて、それらを体系化するという計画でした。

ところが1980年代に入ると、パソコンやワープロ専用機という、それまでには予想もしなかった新しい機器が普及してきました。ただし当時はまだ、ウィンドウズ以前、M

S - DOSの時代です。「京都では『DOS どす』、大阪では『DOS だす』と言っている」などというギャグがあった頃です。パソコンは扱いが難しかったし、高価でした。

その頃（1984年ごろ）、たしか講談社現代新書を読んでいたら、「これから買うならワープロではなくて、パソコンを買うべきだ」と、パソコン購入を強く勧めていました。理由は書いてないのです。ただ、ワープロではなくパソコンを買え、と書いてありました。

あとから考えれば、1990年代半ばに日本の社会に登場するインターネットを念頭に置いて、パソコンを勧めていたのでしょう。しかし、こちらはそんなことは知らないものですから、安くて操作の簡単な、ワープロ専用機を買いました。

使い始めるとすぐ、「これは50音順の辞典（あるいは事典）が作れるな」と思いました。文書をディスプレイ上で自由に移動させられるし、文書どうしの結合・分離も自在です。文書の保存も簡単にできます。

1986年の秋から、私は事典作りに取りかかりました。その頃、愛知学院大学に日本文化学科を新設する計画があり、1988年（昭和63年）4月、私は8年ぶりに名古屋へ戻って来て、愛知学院にお世話になることとなりました。

『言海』との対比

ところで、事典作りに関しては、大きな問題が二つありました。

一つは「辞典（事典）作りなどは、研究とは認められない」という研究者が、少なからずいたことです。一般に、日本文学研究のいちばん良い形態は「論文」です。「注釈書」「現代語訳」「索引」などを、たいへん有益なものだと私は思うのですが、それらは論文よりも一段下のもの、と評価されます。『物語要素事典』については、「資料集にすぎない」「研究以下だ」などの声がありました。

こういう意見は今に始まったことではなく、昔も辞典（事典）作りは、本格的な研究とは、なかなか認められなかったようです。

日本で最初の近代的国語辞典は、大槻文彦（1847～1928）の『言海』です。その『言海』でさえ、研究論文以下の扱いを受けたことが、かつてありました。私は最近になって、『大槻文彦「言海」— 辞書と日本の近代 』（安田正博著 慶應義塾大学出版会 2

018年10月刊)を読んでそのことを知り、びっくりしました。

大槻文彦は幕末期の生まれですから、彼の青年時代には、まだ東京大学はできていません。それゆえ大槻は、徳川幕府の「開成所」や明治新政府の「大学南校」で、洋学を修めています。彼は大学の教授ではなく、文部省の職員です。文部省の方針に従って、時に師範学校の校長を命ぜられたり、高等学校(旧制)の講師を勤めたりしました。大槻は仙台藩(明治維新の時、幕府側についた)出身なので、明治新政府は彼を大学教授にしなかったのだろう、という説もあります。

大槻文彦は明治24年(1891)、40代半ばで『言海』を公刊しました。彼は、

『言海』完成後、人の勧めるに任せて、『言海』一部を学位請求論文として、大学に提出した。ところが、大学の教授の中に「言海は立派な辞書には相違ないが、しかし論文ではない。論文でないものを学位審査論文とすることはいかがであろう」という人があって、学位授与のことは審議されなかった(前掲書p63~64)。

もっとも大槻には、『言海』とは別に、日本語文法に関するすぐれた著作があり、それを学位請求論文として、後に(1899年3月)博士号を得ました。

『言海』は一般社会では高い評価を受け、版を重ねています。明治~昭和の初め頃までは、『言海』という語が、国語辞典の代名詞のようであったそうです。現在の『広辞苑』に近い存在、と言えるでしょう。

夏目漱石の最後の長編小説『明暗』(1916年)にも、『言海』は出て来ます。第78節で、お延が京都の父母にあてて手紙を書くところ。書き終わって「彼女は訂正や添削の必要をどこにも認めなかった。日頃苦にして、使う時にはきつと言海を引いて見る、うろ覚えの字さえそのままで少しも気にかからなかった」とあります。

『言海』のような歴史的な名著と、『物語要素事典』などを同列に扱うのは、身の程知らずも甚だしい、との非難の声もあるでしょう。しかし『言海』と『物語要素事典』には、いくらか似通った点があるので、比べてみたいのです。また、後に述べますが、晩年の大槻文彦の生き方は、私が今後の目標とするところでもあります。私にとりましては、『物語要素事典』を『言海』と対比することが、大きな励みになりますので、何とぞ寛大な心でお許し願いたく存じます。

まず、普通は大勢で執筆する辞典(事典)を、大槻も神山も一人で書いています。

文部省ははじめ、8名ほどの国語学者に国語辞典の編纂を命じたのですが、「船頭多くして舟、山を登る」という具合で、編集方針の議論に時間を費やして、なかなか先へ進まず、何年か経っても「ア・イ・ウ・エ」までしかできませんでした。それならいっそ一人でやった方が良くはないか、というので、漢文も英文も読める大槻文彦に白羽の矢が立ったのです。明治8年（1875）2月のことで、その時、大槻は数え年29歳です。

一方、神山は誰に命ぜられたわけでもなく、自らの意志で『物語要素事典』を作りはじめました。もしも数名で共同作業をするならば、意見の相違が出てきて、明治の『語彙』の時のように、まとまらない可能性が高いと思います。それなら単独で、できるところまでやってみようと考え、執筆に踏み切ったような次第です。

そして単独執筆の『言海』と『物語要素事典』は、分量も同じくらいなのです。

『言海』は、ちくま学芸文庫から縮刷版が出ています。それをもとに文字数を算出してみます。『言海』の辞書本体は1110ページで、3段組になっています。各段は26行で、1行当たりの文字数は、おおむね24～27字です。これは漢字・かな・句読点の活字の大きさが異なるからです。1行に漢字が多ければ字数は少なく、句読点が多ければ字数は多くなります。

今、仮に1行あたりの文字数を26字とすると、 $\times 26 \text{行} \times 3 \text{段} \times 1110 \text{ページ} = 2230800 \text{字}$ 。これを、今ではあまり使われなくなった、400字詰原稿用紙の枚数で表すために $\div 400 = 5577 \text{枚}$ 。

一方、現在Web上にある『物語要素事典』は、増補・改訂して、近日中（といっても1年後くらい）に書籍として刊行されます。B5版の予定で、4段組です。再校ゲラをもとに説明しますと、各段28行、1行当たり平均19字。事典本体は1150ページです。 $19 \text{字} \times 28 \text{行} \times 4 \text{段} \times 1150 = 2447200 \text{字}$ 。 $\div 400 = 6118 \text{枚}$ 。

大槻文彦は明治8年（1875）、数え年29歳で『言海』執筆に着手し、7年後の明治15年までに、5千数百枚の原稿を書き上げています（15年9月から浄書開始。浄書に際して補助員2人。3年半後の19年3月浄書完了）。数え年36歳までに5千数百枚分の原稿を作ったのです。

それに比して神山は、前述したように、満35歳の秋（1986）から『物語要素事典』を作り始め、6千枚の分量にまで持って行ったのは、満65歳の時。およそ30年かかっ

ています。

Web版『物語要素事典』

さて、話をもとにもどしましょう。『物語要素事典』を作るに際して起こってきた問題が、もう一つあります。

ディスプレイ上で事典を作成し、作った文書の保存は、当時ですとフロッピーディスクを用いました。しかし発表するには紙に印刷せねばならず、それが大きな問題でした。20～30年後に事典が完成するまで何も発表しない、というわけにはいきません。それで、ある程度の分量になったら印刷、簡易製本して配布、という方式を試みました。

これを数年おきに何度か繰り返す、という計画です。すなわち小事典を何度か作り、しだいに大きなものにしていって時間を稼ぎ、『物語要素集成』の完成まで持って行くのです。しかしこれはたいへんなことです。作っては捨て、作っては捨て、の繰り返しです。その印刷・製本は印刷業者に依頼することになり、費用も相当かかります。

したがって、これは無理であり無駄である、と断念し、最初の頃やっていたように、論文形式のものを紀要に毎年書いて行く方式に戻ろうか、と想像していたところへ、1990年代半ばになって、インターネットが登場して来ました。

私が雑誌で「インターネット」という文字をはじめて見て、「これは何だろう？」と思ったのは、1995年の8月だったと記憶しています。その頃、「インターネットができるワープロ」というものが、一時的に売り出されました。しかし私も含めて、それまでワープロを使っていた人たちは、パソコン使用に変わって行きました。

インターネットとはどういうもので、何ができるのか、と調べて行くうちに、『物語要素事典』を紙に印刷しなくても、インターネット上にホームページとして発表できるのだ、と私は気づきました。それで『物語要素事典』のデータを、ワープロからパソコンへ移し、ネット上にupしたのが、1998年の4月でした（その時、神山は満46歳9ヵ月）。

「これでようやく、私の研究は軌道に乗った」と、その時思いました。ただ、その頃は通信速度が遅く、リンク先へ飛ぶのに数秒かかるような状態でした。21世紀を迎えてブロードバンドが一般化し、その問題は解決しました。

難病の発症

ところが、そうやって喜んでいるばかりではいけません。今になって思えば、それとほぼ同じ時期に、私の「小脳皮質萎縮症」は発症したらしいのです。

主治医の先生のお話によれば、私の病気は「小脳皮質萎縮症」の6型というものだそうです。6型をネットで検索すると、「45歳前後で発症することが多く、ゆっくり進行する」と記してあります。

私の場合は、まさしく45歳の頃に小さな異常が現れました。それまで私は、ずいぶん早口で授業を行なって来ましたが、それが40代の半ばになって、しゃべるスピードが速くなると、しばしばコントロールが難しくなりました。授業の早口は学生から指摘されることもあり、私は意識的に、話すスピードを少し落としてみました。

するとまことに具合が良い。これからは中高年らしく、ゆっくりと落ち着いて授業をするようにしよう、その方が学生にとっても良いだろう、と私は考えました。ゆっくり落ち着いた話し方が身についたことを、むしろ幸いに受け止めました。

早口でしゃべるのが難しくなったのは、老化の一種だろうと、私は解釈しました。そう解釈したのは、別に理由がありました。私の父親は禿げ頭でしたが、親戚たちは父方も母方も、髪の毛がふさふさしている男と、禿げ頭の男と、両方います。自分は将来どちらになるのか、将来像がイメージできず、私は落ち着かない気分でした。それが45歳くらいから、明らかに髪が薄くなってきたので、「私は禿げグループか。間違いなく父の子なのだ」と思い、自分の将来がはっきりしてきたので、少し嬉しかったくらいです。

50代に入ると、しゃべるのみならず、歩く方も少しおかしくなってきたのですが、私は「これも老化」と思いました。進行がゆっくりなものですから、病気とは気づきませんでした。それが60歳を迎える頃には、杖なしでの歩行が困難になりました。授業も、だんだんしゃべりにくくなって、私は、授業アンケートを恐れるようになりました。とりわけ、「教員の話し方は聞き取りやすかったですか？」の問いに対する回答を、恐る恐る見るようになったのです。

そこでようやく、「これはただの老化ではないかもしれない」と思い、病院を受診し種々の検査をしまして、2013年の秋に、病名を知りました。国指定の難病の一つです。有効な治療法は未確立で、進行性です。私は「近いうちに大学を辞めねばならないかもしれ

ない。まだ62歳だから、今辞めると、もらえる年金が少ない。どうしよう」と思い悩んでおりました。

すると翌2014年になって、相次いで4つのできごとがありました。いずれも仕事の依頼です。

まず2月に、私の中学の時（旧制中学ではない。念のため）からの友人が千葉県の私立大学に勤めておられて、「内地留学するので、愛知学院大学で受け入れてくれ」という依頼。続いて4月の終わりか5月の初めごろ、翌年の公開講座のテーマが「人間の心」だから、夏目漱石の『こころ』について講義を担当してほしい、との依頼。3つめは9月か10月に、「人間文化研究所の次期所長を引き受けてほしい」との話がありました。

4つめは、12月の下旬に、インターネット上の『物語要素事典』を書籍として出版したい、との手紙が某出版社から来ました。某出版社というのは、よく知られた大出版社ではなく、かといって研究書専門の小出版社でもなく、社員数80名前後の中堅出版社です。

このように次々と仕事の依頼があるのは、しばらく勤めを続けよ、ということなのだと、私は考えました。4つの依頼の内、一番早く終了したのが公開講座（2015年）。次が内地留学の受け入れ（2016年）。人間文化研究所の所長は4年つとめて、2018年度に終了しました。なかなか終わらないのが、『物語要素事典』書籍化の仕事です。

書籍版『物語要素事典』

今からもう6年以上前、編集担当のI氏からの手紙を読んだ時には、Web上の『物語要素事典』から記事をピックアップして、原稿用紙1000～2000枚程度の簡便な事典にするのだろう、と私は思っていました。ところが実際にI氏に会って話を聞くと、現在のホームページの内容に増補して、さらに大きな事典にしたいというので、私は驚きました。

とはいえ、書籍化には迷いもありました。大きな事典を作るのは、容易なことではありません。ネット上であれば、間違いが分かった時点で訂正すれば良い。ところが、紙に印刷した本の場合は訂正不可能。校正段階で間違いを正さなければならない。点検にたいへんな手間と時間がかかります。書籍化に本格的に取り組むならば、これまで頻繁に行ってきたWeb版の増補・改訂を、何年間か停止せざるを得ないでしょう。

『物語要素事典』に対しては、外国の大学からのリンクがあります。ハーバード大学からのリンクがあるのを見つけた時は、嬉しかったですが、遠いスイスのジュネーブ大学日本学科からも、リンクされているのには驚きました。日本語で書いたホームページを、外国の方に読んでもらえるというのは、たいへんありがたいことで、「光栄」と言いたくなります。日本の恥にならぬよう、誤りのないように注意して、今後ともWeb版の増補・改訂に専念すべきではないか、とも思いました。

なぜリンクがあることを知ったかと言いますと、恥ずかしながらエゴサーチということをするわけです。学会誌に論文を発表すれば、学界時評などに取り上げられることがあるでしょうし、論文の抜き刷りを方々の先生方に送れば、その礼状の中に感想や批評が書いてあります。ホームページの『物語要素事典』に対しては、学界からの反応は皆無です。そこで『物語要素事典』が、どのように受け止められているか、検索をするのです。

すると思いがけなく、研究者ではない一般の方々が「たいへん面白い」「読んでいると時間を忘れる」というコメントを書いています。創作をこころぎす人々にも、よく利用されているようです。

もともと『物語要素事典』は書籍化を想定せず、ずっとネット上で作って行くつもりでした。書籍化の作業を優先してホームページの更新を停止する、などということはせず（つまり書籍化を断って）、このままホームページの増補を続け、充実させて行く方が良いのではないか、とも思ったのです。

しかし、一人で一冊の事典を執筆する例はめったにありません。やった人は少ないです。そういう仕事ができるのは、大きなチャンスだとも思いました。出版契約書には、「1000部印刷」と記載してあります。『物語要素事典』を、国内外の図書館や大学の研究室に置いてもらえるのは、たいへんありがたいことです。

契約書を交わしたのが翌2015年2月。神山は数え年65歳（満年齢63歳と8ヵ月）です。さっそく増補作業を開始しましたが、これはいつまでやってもきりがないので、1年と4ヵ月ほど経った2016年6月下旬に、一応のまとめをして、原稿のファイルを送りました。

原稿を送りますと、相当の分量ですから、I氏は「辞書用の薄い紙を使いましょう」と言いました。本のサイズも、B5版では大きすぎて片手で持ちにくいので、A5版にすることに決めました。薄めの『広辞苑』のような感じをイメージしたのです。

I氏はまだ若く、辞書類の編集は未経験でありまして、印刷所に「薄い紙で」と指示したところ、「薄い紙は普通の紙の3倍の高価格だ」と言われたそうであります。そのころ、ちょうど『広辞苑』の改訂版を作る話をNHKテレビで放送していて、そこでは辞典用の薄い紙の値段は普通紙の2倍、とっていました。

『広辞苑』のように大部数を刷る辞典だから2倍の価格で、『物語要素事典』のごとき少数の出版物ですと3倍、ひょっとしたらそれ以上の価格になるかもしれません。そんな高い紙を使うことはできませんので断念し、普通の紙を使うことになりました。すると今度は、本が部厚くなりすぎて製本不能だということです。「2冊本にしましょう」とI氏は言い出しました。それでは使いにくいので「困ったなあ」と私は思いましたが、「まあ、出版社に従うしかないか」と、諦めていました。

そうしたら、しばらくして「朗報です」とI氏から連絡があり、「1冊本で行けそうです」と言います。出版社のデザイナーが工夫してくれて、B5版4段組みにすれば、1冊にできそうです。本文1150ページ+索引約200ページで、1350ページくらいになります。

1冊本で行ける、となったのが、2016年の秋ごろのことです。それからもう4年余りが経過しました。いまだに『物語要素事典』は未刊です。

実は『言海』も、原稿完成から書籍刊行までに、予想外の年数を要しております。明治19年(1886)3月には浄書原稿が出来上がったのですが(15年9月から浄書開始。浄書に際して、編輯補助員として大久保初男・中田邦行の2名が配された。3年半後の19年3月浄書完了)、それを文部省に提出しても、どういうわけか、それっきりで音沙汰なしです。

2年半たった明治21年10月になって、文部省側は「もし大槻が自費で刊行するならば、原稿を下賜してもよい」という、めちゃくちゃなことを言い出します。そこで大槻文彦は私財を投じ、政府の印刷局に願い出て、刊行を目ざすのです。政府関係の重要書類の印刷があると、『言海』の印刷は後回しにされる、などの紆余曲折を経て、ようやく明治24年(1891)4月に『言海』は全4冊を刊行し終わるのです。原稿完成・提出から丸5年が経過しています。

私の『物語要素事典』も、原稿は2016年6月の終わりには、出版社へ送っております。出版契約書には「完全原稿提出から24か月(2年)以内に刊行」となっていました。が、2年たった時点ではまだ初校途中でした。

校正を行なっているのは、著者の神山 + 出版社の I 氏の 2 人。出版社の方では、I 氏以外の他の社員を、『物語要素事典』のために振り向ける余裕はありません（校閲部が、句読点・カッコその他の記号の使い方について、意見を述べることはあるようです）。しかも I 氏は、『物語要素事典』に関わることをやればよいわけではなく、編集部の一員ですから、他の出版物の担当も命ぜられます。したがって、数か月にわたって『物語要素事典』の校正ができない、ということも一度ならずありました。

ここでまた『言海』のことを持ち出しますと、『言海』の校正は、3 人（大槻文彦と、先に記した大久保初男・中田邦行）が 2 回ずつ校正しました。6 回校正したことになります。大槻自身が

はじめより二回の校正とさだめたれば、一版面、三人して、六回の校正とはなりぬ。（『言海』あとがき「ことばのうみのおくがき」）

と記しています。これにならって言えば、『物語要素事典』は、2 人で初校・再校の 2 回、あわせて 4 回の校正、となります。それがまだ完了しておりません。

これからの日々

今年 2021 年 1 月現在、『物語要素事典』の校正は、再校が「な行」まで終わっています。ページ数でいえば、1150 ページの内、801 ページまで済んでおります。ただ、本文編のあとの索引が 200 ページもあるので、まだまだ安心してはいられません。

以上のような次第で、『物語要素事典』は、原稿完成後 3 年たっても 4 年たっても刊行されず、もう 4 年半以上が過ぎました。I 氏からは、2 年前、去年、今年と、3 年続けて「今年は、刊行しましょう」という年賀状が来ています。こう述べてくると、本当に刊行できるのか、私は少なからず心配になってきます。

もつとも、ここまで来れば、仮に、著者である神山が近いうちに頓死しても、事典は何とか刊行できるのではないかと、思います。生前刊行がもちろんありがたいですが、没後刊行でも、単独執筆で 1 冊の事典を書き上げることができた、というのは非常な喜びです。

ところで、書籍版の原稿を出版社に送って、それで『物語要素事典』は完成したわけではありません。私は、書籍版の原稿を送って以後も、校正作業の合間に、手もとのパソコン

上で増補・改訂作業を続け、ハードディスクやUSBにデータを保存しています。ただ、出版社の意向もありますので、それらはupせずにおります。だから、Web上の『物語要素事典』は、2015年のはじめ以降、まったく更新しておりません。6年前のままです。私は、何とももどかしい思いでいます。

出版社としては、有料の書籍を刊行する一方で、それと同内容のホームページを無料で見ることが可能だと、書籍販売の妨げになるから、書籍版刊行後はホームページをいったん閉鎖してほしい、との意向です。それはやむをえないだろう、と思うのですが、私は『物語要素事典』の増補を今後も続けたい、と願っております。

『物語要素事典』1000部を売りきって絶版になるまで私は生き延びて、その後にホームページを再開して、思う存分に増補改訂をするのが、今後の目標です。しかしそれまでは待ちきれない可能性が高いので、もっと早い時期に、『物語要素事典』の新規増補分を公にすべく、方法を考えねばならぬかもしれません。

先にちょっとお名前をあげました、大学院生時代の恩師・後藤重郎先生は、70歳を迎えたお祝いの会で、「この上は、死の瞬間まで研究を続けますことを、皆さまにお誓い申し上げます」とおっしゃいました。

会場でそのお言葉を聞いた私（その時、満39歳と9ヵ月）は、たいへん感動し、「自分も将来、そうありたい」と思いました。しかし実際は、死が近づけば身体も苦しく、心も不安定になるから、困難なことだろう、自分はそれができるだろうかと、その後何度も自問自答し、現在の老年にいたっております。

大槻文彦は、死の瞬間とまではいえませんが、それに近いことをした人だと思います。『言海』は版を重ね、よく売れたので、すぐにでも改訂版・増補版が出てよさそうなのに、著者のところへ、富山房（ふざんぼう）から増補版の出版依頼が来たのは、『言海』が刊行されてから20年以上も後の、明治45年（1912）でした。

その時、大槻は数え年66歳（満年齢は64歳と4か月くらい）。それ以来、彼は10数年、『言海』の増補改訂にとりくみ、満80歳で没するのです（編輯補助員は、多い時には大久保初男以下3人いましたが、後には大久保1人になりました）。

現代は「人生100年時代」などと、呑気なことが言える時代ですが、その頃は人生50年で、夏目漱石は満49歳で世を去っていますし、医者である森鷗外でも満60歳までしか生きていません。そういう時代の60代半ばというのは、もう当時の平均寿命を越え

ているわけです。大槻文彦はそういう老齢で、辞書作成に取り組んだのです。

最後の年は、昭和2年（1927）12月31日、大槻は風呂場で倒れます。しかし、驚くべきことにすぐ起き上がり、正月三が日も休まず、机に向かっていたようです。そして正月3日の夜、椅子から下へ崩れ落ち、もう立つことはできませんでした。2月半ばに肺炎を併発。2月17日未明、瞑目。82歳、と書いてあることが多いですが、これは数え年。満年齢ですと80歳と2ヵ月です。

原稿は「さ行」まで浄書が完了していました。「た行」以降の草稿を、大久保初男が中心になって整理します。大槻文彦の死後数年を経た1932年から37年にかけて、『大言海』全4巻 + 索引 が、富山房から刊行されました。

大槻文彦の死を「悲惨」と見る人もいるでしょう。しかし現在の私には、これはまことにうらやましい、英雄的な死のように思われます。私は日常生活では、ひたすら臆病な小心者として一生をおくりましたが、いざ研究となると、はなはだ無鉄砲でありまして、大槻の英雄的な生き方に強い憧れを持っています。

古代の英雄が、自己の分身とも解釈できる巨龍と闘う神話・伝説が、世界のあちこちに見られます。私は、まぎれもなく私の分身である『物語要素事典』と四つに取り組んで、この世の生を終えたいと希望しています。

これはまったくの偶然なのですが、恩師・後藤重郎先生の「重」と、大槻文彦の「彦」の字から、神山の名前「重彦」ができていますので、少しでも両偉人に近づきたい、できればあと5年か10年正気を保って、『物語要素事典』の増補をしたい、と願っているような次第です。

拙い文章を御精読下さいまして、ありがとうございました。

2021年1月18日